

日本語の同格属格名詞句の解釈メカニズム

Interpretation Mechanisms for Japanese Appositive Genitive Noun Phrases

高橋 寛

TAKAHASHI Hiroshi

キーワード

同格、同格属格名詞句、タイプ同定、意味的主要部編入、助詞「の」

抄録

日本語の「TシャツのLサイズ」のような同格属格名詞句について、対応する限定属格名詞句「LサイズのTシャツ」と両者の意味の類似を根拠に統語的派生関係で結ぶ語順倒置分析にはいくつかの重大な経験的問題がある。それらの問題を解決しつつ、より広範な構文を扱えるメカニズムとしてタイプ同定、意味的主要部編入という2つの意味操作を提案する。また同格属格名詞句は助詞「の」の働きにより全体・部分関係を表すと主張する。さらに、意味的主要部編入の適用を制限する意味的・談話的条件を仮定することで語順倒置分析では扱えないさまざまな経験的事実を説明する。最後にタイプ同定の一般化により、さらに分析対象とする構文を広げる可能性を示す。

1. 同格属格名詞句と語彙倒置分析

日本語において2つの名詞句を助詞「の」でつなぐ表現の中に、(1)のように、両名詞句が同格の関係をもつものがある¹。このような表現を「同格属格名詞句」(Appositive Genitive Noun Phrase, AGNP)と呼ぶこととし、その構造を $[_{NP} NP_1 \text{ no } NP_2]$ と表記する²。

- (1) a. この農家ではニワトリのメスを飼っている。
- b. Language の最新号は読みましたか。
- c. 今使っている携帯を iPhone の256GB に買い替えたい。
- d. この店では TシャツのLサイズ がよく売れるらしい。
- e. ブリの照り焼き を食べた。
- f. ネギのみじん切り を混ぜた。
- g. 傘の紳士物 を買った。

(e-g. Hiraiwa 2012: 371)

Hiraiwa (2012, 2013) は AGNP を特徴づける重要な性質として、(2) に示すように元の

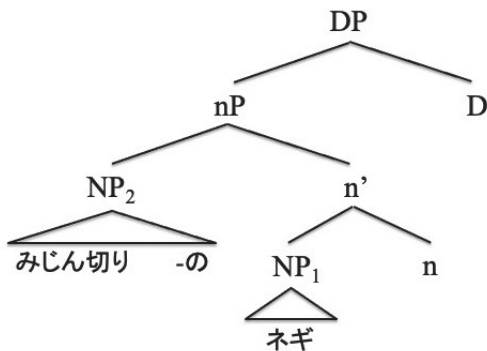
意味を保持したまま NP₁と NP₂を入れ替えることができることを指摘する。この点で AGNP は外見を同じくする (3) の同格表現とは異なる。

- (2) a. この農家ではメスのニワトリを飼っている。
 b. 最新号の *Language* は読みましたか。
 c. 今使っている携帯を256GB の iPhoneに買い替えたい。
 d. この店では L サイズの T シャツがよく売れるらしい。
 e. 照り焼きのブリを食べた。
 f. みじん切りのネギを混ぜた。
 g. 紳士物の傘を買った。
- (3) a. 弟の太郎が来月結婚する。
 b. 日本人の我々にはこの問題が理解できない。
 c. 首都の東京では相変わらず地価が上昇している。
 d. ビールの冷えたのを飲みたい。
- (4) a. 太郎の弟 (≠弟の太郎) が来月結婚する。
 b. *我々の日本人にはこの問題が理解できない。
 c. *東京の首都では相変わらず地価が上昇している。
 d. *冷えたののビールを飲みたい。

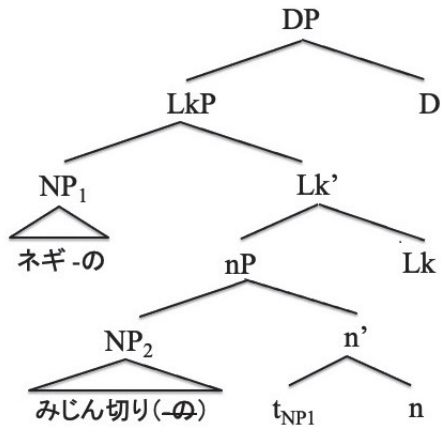
(2) では意味的に先行する NP が後続する NP を限定修飾するが、名詞句全体の指示物はそれに対応する AGNP の指示物と同じである。以下、便宜上 (2) のような名詞句を「限定属格名詞句」(Restrictive Genitive Noun Phrase, RGNP) と呼ぶ。

Hiraiwa (2012, 2013) はこの AGNP における NP₁と NP₂との交替可能性から、(1) の AGNP は RGNP (5a) を基底とした倒置 (inversion)、すなわち、NP₁ の繰り上げ移動 (Raising) によって派生すると主張する。

- (5) a. RGNP



b. AGNP



(5a)において、NP₂内に現れる「の」は2つの名詞句が隣接して生起する時にDによって付与される属格標識 (genitive case marker) である (Hiraiwa 2012: 371)。一方、AGNP (5b)において、NP₁内の「の」は音形を持たない機能範疇 Linkerの主要部 (Lk) によって認可される連結辞 (LINKER) であると仮定される (Hiraiwa 2012: 372)³。また、nは名詞句中の形容詞や関係節のような修飾要素を残して主要部Nが省略された際に義務的に生じる代用形「の」や軽名詞 (light noun) 「ひと」「やつ」「もの」を直接支配する主要部である。

- (6) a. [DP [nP 赤い/ケンが去年買った [n' [NP 車] [n]] D]
 b. [DP [nP 赤い/ケンが去年買った [n' [NP e] [n*(の)]] D]

Hiraiwa (2012: 359)

このような語順倒置に基づく分析を「語順倒置分析」と呼び、次節ではその問題点を指摘する⁴。

2. 語順倒置分析の問題

これまで見てきた語順倒置に基づく分析でまず問題となるのは、適格なRGNPがいつも適格なAGNPを派生するわけではないということである。例えば、次の(7a, a')のRGNPとAGNPはともに容認可能であるが、(7b)のRGNPに対応する(7b')のAGNPは容認不可である。

- (7) a. 僕は [イチゴ味のシェイク] を飲んだ。
 a'. 僕は [シェイクのイチゴ味] を飲んだ。
 b. 僕は [イチゴ味の飲み物] を飲んだ。
 b'. *僕は [飲み物のイチゴ味] を飲んだ。

(7a)と(7b)において「の」で繋がれているNPの間には同じ限定修飾関係が成立している

ことから両者は(5a)の構造をもつと考えられる。しかしそこから派生するAGNPの(7a')と(7b')の間には明らかな容認度の違いが認められる。もしこの違いが何らかの統語的要因によるものだとすると、例えば(7a')における「の」は同格の連結辞 (appositive linker) であるが、(7b')の「の」はそれとは違う種類の助詞「の」であり、(7b)の名詞句内でNP₁「飲み物」の移動を認可しないというような説明がなされることになる。しかし、この説明が循環論に陥らないためには両者の「の」を区別する独立した理由が必要であり、Hiraiwa (2012, 2013) においてそのような理由は示されていない。

一方、(7b')の不適合性を意味的要因に求める説明はどうか。まず、Hiraiwa (2012, 2013) は所有関係などRGNPにおける限定修飾以外の意味関係で繋がれた[NPのNP]形の名詞句はその中のNP同士を入れ替えると非文法的になるという事実を指摘している⁵。

- (8) a. 直美の本 (譲渡可能な所有)
 a'. *本 of 直美
 b. 直美の手 (譲渡不可能な所有)
 b'. *手 of 直美
 c. 日本橋のデパート (場所)
 c'. *デパート of 日本橋
 d. 今朝の新聞 (時)
 d'. *新聞 of 今朝
 e. 火山の噴火 (主語)
 e'. *噴火 of 火山
 f. 橋の建設 (目的語)
 f'. *建設 of 橋

しかし、(7a, b)はどちらもRGNPであり2つのNPの意味関係に違いはない。

さらにHiraiwa (2012: 372) はAGNP内部で成立する同格関係は叙述文で表される意味関係と同じであるとみなし、その証拠として(1)のAGNPは(9)に示す書き換えが可能であることを挙げている。

- (9) a. このニワトリはメスだ。
 b. この *Language* は最新号だ。
 c. 今使っている iPhone は246GB だ。
 d. このTシャツはLサイズだ。
 e. そのブリは照り焼きだ。
 f. そのネギはみじん切りだ。
 g. その傘は紳士ものだ。

しかし、このような叙述文への書き換えは、同格以外の意味関係を表す(8)の名詞句については許されない。

- (10) a. *直美は本だ.
 b. *直美は手だ.
 c. *日本橋はデパートだ.
 d. *今朝は新聞だ.
 e. *火山は噴火だ.
 f. *建設は橋だ.

叙述文への書き換えの可否はたしかに AGNP (1) とそれ以外の [NP NP の NP] 形の名詞句 (8) を区別するが、(11) に示すように 2 つの NP 間に叙述関係が成立することは AGNP であるための十分条件とはならない。

- (11) a. そのシェイクはイチゴ味だ.
 a'. 僕は [シェイクのイチゴ味] を飲んだ. (=7 a')
 b. その飲み物はイチゴ味だ.
 b'. *僕は [飲み物のイチゴ味] を飲んだ. (=7 b')

これと同じ問題は (12a'-f') のような名詞句においても生じる。

- (12) a. 弟は [スチール製の机] を使っている.
 a'. ?? 弟は [机のスチール製] を使っている.
 b. これは [勝沼産の葡萄] で作ったワインだ.
 b'. ?? これは [葡萄の勝沼産] で作ったワインだ.
 c. 掃除中にうっかり [九谷焼の皿] を割ってしまった.
 c'. *掃除中にうっかり [皿の九谷焼] を割ってしまった.
 d. [長髪の学生] が面接にやってきた.
 d'. * [学生の長髪] が面接にやってきた.
 e. 彼女は [ストレートの髪] をばっさり切った.
 e'. *彼女は [髪ストレート] をばっさり切った.
 f. その予備校では [女の先生] が人気だ.
 f'. *その予備校では [先生の女] が人気だ.

- (13) a. 弟の机はスチール製だ. (Cf. (12a'))
 b. この葡萄は勝沼産だ. (Cf. (12b'))
 c. この皿は九谷焼だ. (Cf. (12c'))
 d. その学生は長髪だ. (Cf. (12d'))
 e. 彼女の髪はストレートだ. (Cf. (12e'))
 f. 人気の先生は女だ. (Cf. (12f'))

このことから、(1) や (7a') の AGNP を許し、(7b') や (12a'-f') の AGNP を許さない意味的要因を単に叙述関係の成立の可否に求めることは適切でないと言えよう。

本稿では AGNP と RGNP を統語的派生によって関係づけることはせず、それぞれが別の構文として基底生成されると仮定する。そして両者は全く異なる意味操作によって解釈を与えられ、その操作に課せられる意味的・談話的条件が上で見た AGNP の容認度の差をもたらすと主張する。

3. AGNP の意味解釈

3. 1. NP₁ と NP₂ の意味関係

前節で見た (7b') や (12a'-f') など一部の AGNP の容認度の低さが意味的要因によるものだとすると、それらの AGNP のどこに問題があるのでしょうか。

まず、(7) の例からいえることは、NP₁ の主要部名詞を変えることにより容認度に違いが生じることから、少なくとも AGNP の適格性に NP₁ が関わっていることは確かである。

- (14) a. ?? 僕は [NP [NP₁ 飲み物] の [NP₂ イチゴ味]] を飲んだ. (=7b')
 b. 僕は [NP [NP₁ シェイク] の [NP₂ イチゴ味]] を飲んだ. (=7a')

その一方で、(15) の例から、NP₂ も AGNP 全体の容認度に影響を与えることがわかる。

- (15) a. [NP[NP₂ カシミア] の [NP₁ セーター]] を買った.
 a'. *[NP[NP₁ セーター] の [NP₂ カシミア]] を買った.
 b. [NP[NP₂ カシミア100%] の [NP₁ セーター]] を買った.
 b'. ?[NP[NP₁ セーター] の [NP₂ カシミア100%]] を買った.

(15b') はこのままではやや不自然に響くが、「(友達と服を買いに行って) フリースじゃ寒いよ。買うならセーターのカシミア100%だよ。」のような文脈の中に置くと容認度が高まる。一方、(15a') は同じ文脈を与えても依然として悪い。

同様にこのままでは不自然な AGNP (12a') も (16) のような文脈の中では容認度が上がる。

- (12) a'. ?? 弟は [机のスチール製] を使っている。
 (16) (友達と家具店を訪れて) この店では [机のスチール製] がよく売れているそうだよ⁶。

以上のことから、AGNP の適格性はそれを構成する NP₁、NP₂ それぞれの意味とその間に成り立つ意味関係によって決まると言えるが、すでに論じたようにその意味関係が Hiraiwa (2012, 2013) が主張する叙述関係でないことは明らかである。本稿ではその意味関係を (17) のような名詞句に見られる「全体・部分関係」(whole-part relationship) であると主張する。

- (17) a. 手の指
 b. 車のハンドル
 c. 学生の大部分 / 3人 / 何人か

- d. 震災で飼い主を失ったペットの未だ引き取り手の見つからない猫が多くいる。

そして、この全体・部分関係を指示するのが助詞「の」である。

3.2. タイプ同定

AGNP の意味解釈のメカニズムを明らかにするために、まず AGNP と同じ意味を持つ (18) のような名詞句がどのように解釈されるのかを考えたい。

- (18) この店では [NP₁ T シャツ] の [NP₂ [NP_L サイズ] の [N やつ／もの／φ]] がよく売れるらしい。

(18) の NP₂ 内では「L サイズ」と軽名詞の「やつ／もの」が助詞「の」で結ばれており、これらの軽名詞は省略可能である。この「の」は(2)の RGNP がもつ「の」と同じ働きをしており、それが繋ぐ NP 間の限定修飾関係を示す。一方、(18) で NP₁ と NP₂ 間に介在する「の」は AGNP の「の」と同一のものであり、前節の仮定が正しければ、その 2 つの NP を全体・部分関係で結んでいる。NP₁ と NP₂ が全体・部分関係にあるということは、(17c, d) の例のように、NP₁ の指示物の集合に対して NP₂ の指示物がその部分集合になっているということである。すなわち、(18) の名詞句全体の解釈は「T シャツの集合の中で、L サイズという属性をもった T シャツの集合」となる。このような全体・部分関係の成立は NP₁ と NP₂ を入れ替えて包含関係を逆にすると容認不可になることから支持されよう。

- (19) *この店では [NP₂ L サイズのやつ／もの／φ] の [NP₁ T シャツ]] がよく売れるらしい。

さて、(18) の NP₂ 中で「L サイズ」に限定修飾される軽名詞「やつ」「もの」、およびそれに対応する空の要素（以下、Pro と表記する）は英語の不定代名詞 one と同じく、それ自身特定の指示物は持たず、単に漠然と [THING(S)] を表す。したがって名詞句全体の解釈を得るには、まず、この [THING(S)] の意味的内容、すなわちそれが生起する文脈においてどのような意味タイプ⁷を表すのかを特定する必要がある。例えば、(18) の「やつ」「もの」、Pro が表す [THING(S)] の意味タイプは NP₁ の指示物のタイプ、すなわち「T シャツ」である。ここで、軽名詞および Pro の未指定の意味タイプを決定する NP を「先行詞」と呼び、両者の間に成立する意味タイプの同一性を(20)のようにギリシア文字の同一指標によって示すことにする。

- (20) [NP₁ T シャツ_a] の [NP₂ L サイズのやつ_a／もの_a／Pro_a]]

このように、名詞句内に意味タイプが未指定の要素があるとき、その先行詞を求め、そこから前者の意味タイプを決定する意味操作を仮定し、それをタイプ同定 (Type Identification) と名付ける。

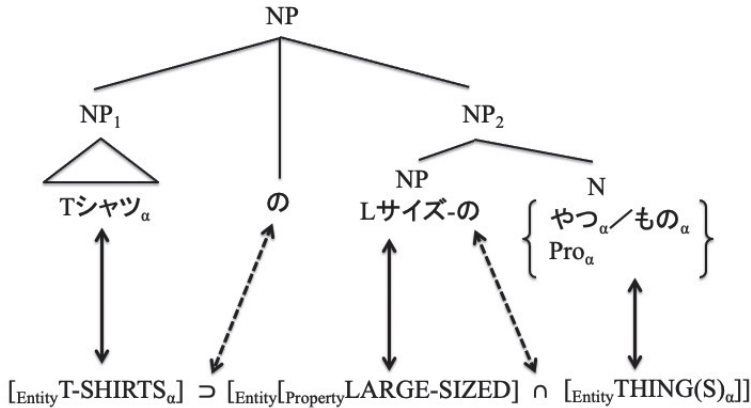
以上の仮定をもとに (18) の名詞句全体の意味を次のように表示する。

$$(21) \text{ [Entity T-SHIRTS}_\alpha \text{]} \supset \text{ [Entity [Property LARGE-SIZED]} \cap \text{ [Entity THING(S)}_\alpha \text{]]}$$

ここで、「 $A \supset B$ 」は A を全体とし B をその部分とする全体・部分関係が成り立っていることを表す。また、「 $A \cap B$ 」は Property である A が Entity である B を限定修飾していることを表す。

そして、(21) の意味表示と (20) の統語構造との対応関係を図示すると (22) のようになる。

(22)



3. 3. 意味的主要部編入

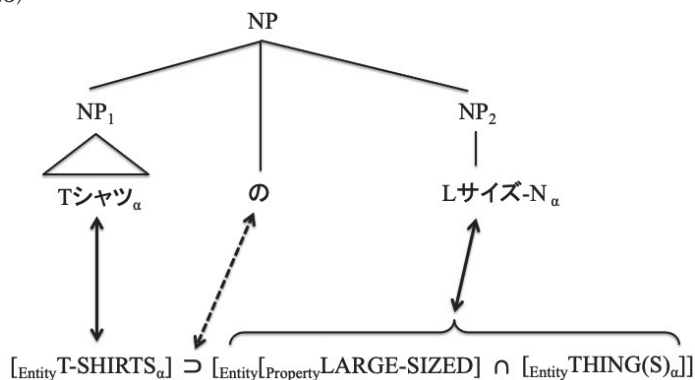
次に AGNP の意味解釈に目を移そう。AGNP 「T シャツの L サイズ」はそれに対応する (20) と解釈は同じであるが、(21) の意味表示を得るためには、タイプ同定に加えてさらに別の意味操作が必要である。その操作が以下に論じる意味的主要部編入 (Semantic Head Incorporation) である。

(21) に示すように 「L サイズ」の本来の意味範疇は Entity でなく Property である。しかし、AGNP $[_{NP}[_{NP_1} \text{T シャツ}]]$ の $[_{NP_2} \text{L サイズ}]]$ において 「L サイズ」と NP_1 との間に全体・部分関係を成立させるためには、両者の意味範疇を Entity に揃える必要がある。そこで意味的主要部編入によって NP_2 に [THING(S)] が組み込まれ、 NP_2 の意味範疇が Entity に変えられると仮定する。なお、この操作によってもたらされる意味表示上の変化が統語構造に反映されるかどうかについてここで確定的なことを言うだけの根拠を持ち合わせていないが、暫定的に空の N が NP 内に導入され、もともとの NP 主要部と複合語 $[_N \text{N-N}]$ を形成すると仮定しておく⁸。

この [THING(S)] の編入によって、 NP_2 内に Property の 「L サイズ」が限定修飾する対象がもたらされることで、 NP_2 全体としては Entity を表すようになる。次に、先述のタイプ同定の適用により、THING(S) の意味タイプが 「T シャツ」に決まり、最後に 「の」によって NP_1 と NP_2 が全体・部分関係で結ばれる。このような一連の意味的操作を経て AGNP 「T シャツの L サイズ」は (18) の NP と同じ意味表示、すなわち (23) を

得る。

(23)



(23)の意味表示は、この名詞句の主要部が統語的にはNP₂「Lサイズ-N」になるが、意味的には「Tシャツ」となること、すなわち、(1d)においてよく売れるのは「(Lサイズという属性をもつ) Tシャツ」であることを正しく反映している。

4. タイプ同定と意味的主要部編入の経験的証拠

4.1. N' 削除

これまでの議論で AGNP の意味解釈にはタイプ同定と意味的主要部編入という操作が関わっていると主張したが、以下ではこのような操作を仮定する根拠を示したい。

まず、タイプ同定から見ていこう。Hiraiwa (2012: § 5.2, 2013: § 3.2) は AGNP の統語的特徴として N' 削除が許されないという事実を指摘する⁹。

- (24) a. 弟は L サイズの T シャツを買ったが、私は M サイズの [e] を買った。
 b. *弟は T シャツの L サイズを買ったが、私はジーンズの [e] を買った。

Hiraiwa (2012: § 5.2) は (5) に示した派生を前提に、N' 削除の可否は N' 削除のあとに残される要素が最終的に占める構造的な位置によって決まると主張する。具体的には、(5a) の NP₂ 「みじん切りの」は DP 指定部に、AGNP である (5b) の NP₁ 「ネギの」は LkP 指定部にそれぞれ現れるとし、N' 削除は残される NP が DP 指定部にあるときにのみ適用するという仮定に基づき、AGNP における N' 削除を不可とする。しかし、そもそもなぜ残される NP が DP 指定部を占めないと N' 削除が適用できないのかについては説明が与えられておらず循環論に陥っている。

一方、タイプ同定を仮定するとより自然な意味の説明が可能になる。まず、(24a, b) それぞれの基底となる文は (25a, b) である。

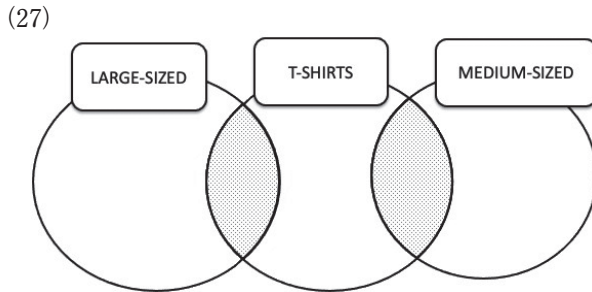
- (25) a. 弟は [L サイズの [T シャツ]] を買ったが、私は [M サイズの [T シャツ]] を買った。
 b. 弟は [T シャツの [L サイズ]] を買ったが、私は [ジーンズの [L サイズ]] を

買った。

(25a) においてふたつの名詞句「LサイズのTシャツ」と「MサイズのTシャツ」はその中で修飾・被修飾関係が成立しており、その意味表示は(26)のように書ける。

$$(26) \dots [\text{Entity}[\text{Property}\text{LARGE-SIZED}] \cap [\text{Entity}\text{T-SHIRT}]] \dots \\ [\text{Entity}[\text{Property}\text{MEDIUM-SIZED}] \cap [\text{Entity}\text{T-SHIRT}]] \dots$$

さらに、これを図式化すると次のようになる。

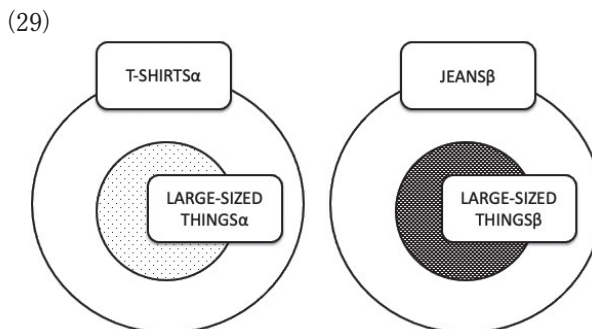


格助詞「と」で結ばれている2つの名詞句の内部では、それぞれ異なった Property を表す NP が限定修飾をしているが、被修飾要素はともに「Tシャツ」である。よって同一性条件のもとで片方の「Tシャツ」を削除するのに何の問題もない。

一方、AGNP の場合は意味的主要部編入ののちにタイプ同定により、THING(S) の意味タイプが決定される。そうすると、(25b) の2つの名詞句は次のような意味表示を得る。

$$(28) \dots [\text{Entity}\text{T-SHIRTS}_\alpha] \supset [\text{Entity}[\text{Property}\text{LARGE-SIZED}] \cap [\text{Entity}\text{THING(S)}_\alpha]] \dots \\ [\text{Entity}\text{JEANS}_\beta] \supset [\text{Entity}[\text{Property}\text{LARGE-SIZED}] \cap [\text{Entity}\text{THING(S)}_\beta]]$$

これを図式化したのが(29)である。



ここで重要なのは、それぞれの名詞句内でタイプ同定に関わる THING(S) の先行詞が異なるということである。すなわち、「TシャツのLサイズ」においては「Lサイズ」は

THING(S)=T シャツを限定修飾し、「ジーンズのLサイズ」においては「Lサイズ」がTHING(S)=ジーンズを限定修飾するため、(29)で色付けをした部分集合間にN' 削除の同一性条件が成立しない。よって、AGNPにおいてN' 削除は許されないのである。このような説明はタイプ同定（と意味的主要部編入）という意味的操作を仮定してはじめて可能になる。

4.2. 意味的主要部編入の適用条件

次に、語順倒置分析で問題となる、RGNPは許されるがそれに対応するAGNPは許されないケースについて検討する。これに該当するのは以下のようなAGNPである。

- (7) b. 僕は [イチゴ味の飲み物] を飲んだ。
 b'. ??僕は [飲み物のイチゴ味] を飲んだ。
- (12) a. 弟は [スチール製の机] を使っている。
 a'. ??弟は [机のスチール製] を使っている。
 b. これは [勝沼産の葡萄] で作ったワインだ。
 b'. ??これは [葡萄の勝沼産] で作ったワインだ。
 c. 掃除中にうっかり [九谷焼の皿] を割ってしまった。
 c'. *掃除中にうっかり [皿の九谷焼] を割ってしまった。
 d. [長髪の学生] が面接にやってきた。
 d'. * [学生の長髪] が面接にやってきた。
 e. 彼女は [ストレートの髪] をぱっきり切った。
 e'. *彼女は [髪のストレート] をぱっきり切った。
 f. その予備校では [女の先生] が人気だ。
 f'. *その予備校では [先生の女] が人気だ。
- (15) a. [NP_{NP1} カシミア] の [NP₂ セーター] を買った。
 a'. * [NP_{NP1} セーター] の [NP₂ カシミア] を買った。

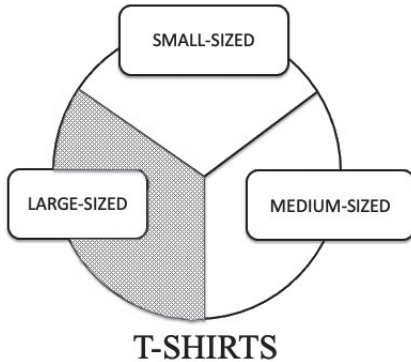
これらの例を扱うのに重要になるのが意味的主要部編入である。ここでAGNPの解釈において、意味的主要部編入の適用要件として(30)を仮定する。

- (30) あるNPへの意味的主要部編入が許されるのは、タイプ同定でそのNPの先行詞となるNPの意味タイプが慣習や一般常識など言語外の知識に基づいて有限個の下位タイプに余すところなく分けられる場合に限られる。

この条件がAGNPの容認度にどう影響するのかを具体例で見てみよう。まず、適格なAGNPの「TシャツのLサイズ」の解釈について考える。先に論じたようにNP₂「Lサイズ」にはTHING(S)が編入されなければならない、そのためには(30)を満たさなければならない。ここで、「Lサイズ」のタイプ同定における先行詞「Tシャツ」は、慣習的に

そのサイズという観点から S サイズ、M サイズ、L サイズなどの有限個の下位タイプに分割しつくされることをわれわれは百科事典的知識として知っている。このことは (31) のように図式化できよう。

(31)



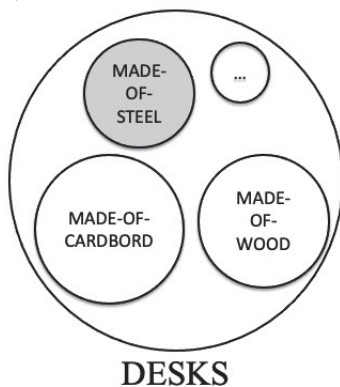
これはたしかに(30)の条件を満たしており、よって NP₂ への THING (S) の意味的主要部編入が許されることになる。

一方、(12a') の AGNP はどうか。

(12) a'. ?? 弟は [机のスチール製] を使っている。

机は材質に関していうとスチール製、木製、ダンボール製、石でできたものなど下位タイプの可能性に制限はなく、有限個の下位タイプに余すところなく分けられるとは言えない。

(32)



したがって、(12a') において NP₂ 「スチール製」 への意味的主要部編入は(30)の条件を満たしていないために阻止される。その結果、NP₂ は意味範疇が Property のまま残され、NP₁ と全体・部分関係を結ばずに、AGNP 全体が不適格になると説明できる。

この説明の利点のひとつは、AGNP の容認可能性が文脈、すなわち、談話的条件に影

響を受けるようなケースも扱えることである。意味的主要部編入の適応可能性を決める条件(30)は統語的ではなく談話的なものである。たとえば、(16)のように机の材質が問題になり、なおかつ、その下位タイプが「慣習的に」有限個に制限される家具店のような文脈では(30)の条件が満たされ、最終的にAGNPの解釈が正しく得られる。

(33) $[\text{Entity DESKS}_\alpha] \supset [\text{Entity} [\text{Property MADE-OF-STEEL}] \cap [\text{Entity THING(S)}_\alpha]]$

同様に、(15a',b')の対比も(30)によって説明される。

(15) a'. * $[\text{NP} [\text{NP}_1 \text{セーター}] \text{の} [\text{NP}_2 \text{カシミア}]]$ を買った。
 b'. ? $[\text{NP} [\text{NP}_1 \text{セーター}] \text{の} [\text{NP}_2 \text{カシミア100\%}]]$ を買った。

セーターを「カシミア」のように単にその素材で下位タイプに分けようとする「机」の場合(32)と同じような事態が生じ、(30)の条件は満たされない。一方、「カシミア100%」は「コットン100%」や「ウール100%」のようにその素材の品質の高さを強調するものであり、特に衣料品売り場のような文脈を想定すると、慣習的にその種類は限られており、有限個の下位タイプに分類しつくされると言えよう。よって(15b')は意味的主要部編入の適用を受け容認度が上がるのである。

これと同様な説明は(12b, b')～(12e, e')の対比についても成立する。「葡萄」や「皿」を産地で区分する場合、特別な文脈なしでは、それを余すところなく分類しつくすような下位タイプを設定することは困難である。また、「学生」を髪の状態によって、また、「髪」自体をその形状や状態によって下位タイプに分類し尽くすことも慣習的、常識的にはありそうにない。よって(12b')～(12e')のAGNPは意味的主要部編入を受けられず、適切な解釈が与えられないと説明できる。

以上の例においてはすべてNP₂の意味内容が意味的主要部編入の可否を決めたが、(14)ではNP₁の意味内容がその決定に関わっている。

(14) a. ??僕は $[\text{NP} [\text{NP}_1 \text{飲み物}] \text{の} [\text{NP}_2 \text{イチゴ味}]]$ を飲んだ。(=7b')
 b. 僕は $[\text{NP} [\text{NP}_1 \text{シェイク}] \text{の} [\text{NP}_2 \text{イチゴ味}]]$ を飲んだ。(=7a')

(14b)のAGNPとは対照的に(14a)の容認度が低いのはなぜか。これは、われわれの百科事典的知識としてシェイクは「イチゴ味」「バナナ味」「チョコレート味」など限られた種類に分類され、それでシェイクを分類し尽くせることを知っている。一方、飲み物一般に関してこのような風味による有限個の下位タイプへの分類がなされる文脈は考えづらい。よって(30)の条件を満たして意味的主要部編入が許されるのは(14b)だけとなる。

これまでの議論はすべて(30)が意味的主要部編入の適用条件であることを前提としているが、(30)に盛り込まれた意味的・談話的条件をタイプ同定に課せられる条件と考えることはできないであろうか。

この問いに答えるために次の例を見てみよう。

- (34) a. ?? 僕は [飲み物のイチゴ味] を飲んだ. (=7b')
 b. 僕は [飲み物のイチゴ味の (やつ)] を飲んだ.
- (35) a. ?? 弟は [机のスチール製] を使っている. (=12a')
 b. 弟は [机のスチール製の (もの)] を使っている.
- (36) a. ?? これは [葡萄の勝沼産] で作ったワインだ. (=12b')
 b. これは [葡萄の勝沼産の (もの)] で作ったワインだ.
- (37) a. * 掃除中にうっかり [皿の九谷焼] を割ってしまった. (=12c')
 b. 掃除中にうっかり [皿の九谷焼の (やつ)] を割ってしまった.
- (38) a. * [学生の長髪] が面接にやってきた. (=12d')
 b. [学生の長髪の (やつ)] が面接にやってきた.
- (39) a. * [[セーター] の [カシミア]] を買った. (=15a')
 b. [セーターのカシミアの (やつ)] を買った.

すでに指摘したように(34a)～(39a)のAGNPはすべて不適格であるが、軽名詞を加えて [NP NPのNPの(やつ/もの)] 形に変えると容認度が大きく上がる。前者と後者の違いは、(34b)～(39b)は軽名詞、あるいはProによってNP₂に最初からTHING(S)が存在するため、意味的主要部編入の必要がないことにある¹⁰。さらに、(34b)～(39b)は(30)の意味的・談話的条件を満たさなくとも適格であるということから、(30)はタイプ同定一般に課せられる条件ではなく、AGNPの解釈にのみ必要である意味的主要部編入に課せられる条件と考えるべきである。

4.3. 残る問題

(34)～(39)に見られる対比について上の説明が正しいとして、次の(40b)を軽名詞を使って(40c)に言い換えても依然として容認不可なのはなぜだろうか。

- (40) a. 彼女は [ストレートの髪] をばっさり切った. (=12e)
 b. * 彼女は [髪ストレート] をばっさり切った. (=12e')
 c. * 彼女は [髪ストレートの (やつ)] をばっさり切った.

このことは(40b, c)の名詞句に共通する全体・部分関係の成立に関わっていると考えられる。これらの名詞句の意味表示は次のようになる。

$$(41) \text{[Entity HAIR}_a\text{]} \supset \text{[Entity [Property STRAIGHT]} \cap \text{[Entity THING(S)}_a\text{]}}$$

(41)は「髪の集合の中でストレートである属性を持つ髪の集合」という全体・部分関係

の解釈を表しており、(40b, c)の彼女はそれを切ったという陳述は、彼女の髪の一部がストレートであり、その部分を切ったという現実世界ではありそうもない状況を想起する。このことを裏付ける事実として、述部を「ばっさり切った」から「抜いた」に変えてやると、(40c)の容認度が上がる。これは彼女の髪は巻き毛だが、中にはストレートの毛も混じっていて、それを抜いたという状況が容易に想像できるからだろう。一方、そのように述部を変えても(40b)の容認度は依然として低いのは、前節で論じたように、(30)の条件を満たさず意味的主要部編入が阻止されるからと説明されよう。

最後に、(12f, f')の対比を考える。

(12) f. その予備校では [女の先生] が人気だ.

f'. *その予備校では [先生の女] が人気だ.

(12f) が自然な表現であるのに対して(12f')はAGNPの解釈としては容認不可である¹¹。さらに、(34)～(39)とは異なり軽名詞やProの付加によっても容認度は上がらない。

(42) *その予備校では [先生の女の (やつ／ひと／Pro)] が人気だ.

これらの事実を説明するために、まず「女」という語がPropertyとして人の性質を表す場合と、Entityとして個々の女性を表す場合の両方があることに注目する。前者の場合は(12f)のように限定修飾語として用いられるが、後者の場合は限定詞や限定修飾語と共に共起したり、動詞の項として生起したりできる。

(43) a. 警察は不審な女を逮捕した.

b. その女が犯人をかくまっていた.

このようなEntityとしての「女」は、(44)の意味表示を与えられ、その語義に最初からPERSONの意味を内包していると考えたい。

(44) [EntityADULT-FEMALE-PERSON]

そうすると、(12f')の「先生の女」をAGNPとして解釈するなら、次のような意味表示が与えられることになる。

(45) [EntityTEACHER_a] ⊃ [EntityADULT-FEMALE-PERSON_a]

ここで、タイプ同定の適用条件として、語義に内在する意味要素の一部分だけに適用することはできないと仮定する。(45)のNP₂はその語義の一部であるPERSONのタイプが同定されているため、今仮定した条件の違反になる。よって、NP₁とNP₂は同じタイプのEntityであるとは解釈されず、両者間に全体・部分関係を成立させることができない。このような理由により、(12f')の「先生の女」はAGNP以外の読みしかもたないことが

説明できる。

このタイプ同定の適用条件の妥当性を示す証拠として、「女」と同様、性別を表す「メス」という表現が、(1a)でみたように AGNP として解釈可能であることが挙げられる。

- (1) a. その農家ではニワトリのメスを飼っている。

「メス」はそれ単独で動詞の項になったり、限定修飾語や限定詞を伴ったりはしないことから Property の意味しか持たないと言える¹²。

- (46) a. ?? うちでは (かわいい) メスを飼っている。
b. ?? (その) メスが障子を破った。

そうすると、(1a)のように「メス」が AGNP に用いられる場合は意味的主要部編入によって THING を付加しなければならないが、それにタイプ同定が適用することは先の適用条件の違反にはならず、(47)の正しい表示が得られる。

- (47) $[\text{EntityCHICKEN}_\alpha] \supset [\text{Entity}[\text{PropertyFEMALE}] \cap [\text{EntityTHING}_\alpha]]$

それでは、(42)のように「女」が Property を表し、かつ軽名詞や Pro と共起するとき、その名詞句が容認不可になるのはどうしてであろうか。この場合、PERSON は女の語義の外にあるので、タイプ同定が適用し、(48)のような適格な意味表示が得られるはずである。

- (48) $[\text{EntityTEACHER}_\alpha] \supset [\text{Entity}[\text{PropertyADULT-FEMALE}] \cap [\text{EntityPERSON}_\alpha]]$

軽名詞「やつ」および Pro の使用については、それがひとについて用いる場合は敬意を払うべき対象を指せないという語用論的制約がある。

- (49) a. 東大出の先生／＃やつ／Pro に数学を教えていただいた。
b. 東大出の友達／やつ／Pro に数学を教わった。

この語用論的制約によって (42)の「先生の女の(やつ)」が悪くなるという説明も可能ではあるが、軽名詞を「ひと」にしても容認性が改善されないのはなぜであろうか。

この問いに対して現時点ではっきりとした答えは持ち合わせていないが、次の (50a,b)の対比で b の容認度が高くなることから、問題は軽名詞の「ひと」そのものにあるのではなく、「女のひと」が「先生」との間に全体・部分関係を成立することを阻む何らかの語用論的要因が関わっているものと思われる。

- (50) a. * その予備校では [先生の女のひと] が人気だ。
b. ? その予備校では [先生の海外留学経験のあるひと] が人気だ。

この語用論的要因がどのようなものであるかはここではこれ以上論じない¹³。

これまでの議論をまとめよう。本稿で仮定したタイプ同定、意味的主要部編入、そして後者に課される意味的・談話的適用条件という3つの道具立てを用いることで、AGNPのうち語順倒置分析で扱えるものだけでなく、その分析にとって問題になるようなAGNP、さらにはAGNPに関連するRGNPや軽名詞、Proを含む構文など、広範な言語事実に対して説明を与えることができた。このことは、これらの構文の特性や振る舞いを一般的に捉えようとするならば、統語的アプローチではなく意味的アプローチを取るべきであることを示している。

5. タイプ同定の応用可能性とまとめ

最後に、本稿の分析で重要な働きをするタイプ同定を、タイプの同定だけでなく指示物の同定にまで一般化することによって、さらに広範な構文の分析にも応用可能であることを示したい。

そのような構文の一つがののしり語を用いた評価的同格構文 (Evaluative Appositive Construction)¹⁴である。

- (51) a. [太郎のバカ] がまたいたずらをした。
 b. [太郎のケチ] は絶対お金を貸してくれない。
 c. 花子が [太郎の弱虫] を泣かせた。

この構文は意味を変えずに「の」でつながれた二つのNPを入れ替えられることや、N'削除を許さないなどAGNPといくつかの共通点がある。

- (52) a. [バカの太郎] がまたいたずらをした。
 b. [ケチの太郎] は絶対お金を貸してくれない。
 c. 花子が [弱虫の太郎] を泣かせた。

- (53) a. 花子が殴ったのは太郎のバカじゃなく次郎のバカだ。
 b. *花子が殴ったのは太郎のバカじゃなく次郎の [e] だ。

これらの構文に生じる「バカ」「ケチ」「弱虫」などのののしり語は、AGNPにおけるNP₂の位置に生起するとき、「女」と同様、PropertyではなくEntityを表し、その語義の中に最初からPERSONを含んでいると分析する。さらには、評価的同格構文における助詞「の」はAGNPのそれと異なり、ふたつのNPの同一関係 (Identification) を意味すると仮定し、それを「=」で表記する。これにより、ののしり語の意味を構成する [Entity 属性 + PERSON] の指示物と他方のNP (これを先行詞と呼ぶ) の指示物とが同一関係に入り、これをAGNPにおけるタイプの同一性と同様ギリシア文字 (α) の同一指標で表すことにする。

- (54) [[Entity TARO α] = [Entity FOOLISH-PERSON] α]

ここで注意すべきは、AGNP に適用するタイプ同定とは異なり、指示物の同定においてはその操作がののしり語の語義の一部分である PERSON だけに適用するのではなく、語義全体に適用するということである。このことを示すのに、(54)では指標をののしり語が表す Entity の外側に振ってある¹⁵。従って、(45)に関して論じたようなタイプ同定の適用条件はここでは働かず、評価的同格構文の正しい解釈が得られる。

評価的同格構文に対するこのような分析が正しいとすると、(54)の意味表示から、「=」でつながれた項を入れ替えても意味の違いは生じないことや、(53)で「太郎のバカ」と「次郎のバカ」の「バカ」はそれぞれ [FOOLISH-PERSON] _{α} (α =TARO) と [FOOLISH-PERSON] _{β} (β =JIRO) と解釈されるため削除の同一性条件を満たしておらず N' 削除を受けないことが自然に説明できる。

高橋 (2015) では、このようなタイプ同定の一般化によって、AGNP、評価的同格構文はもとより、英語の *Ass Camouflage Construction* (Collins, Moody and Postal 2008, Levine 2008) (例 *They done arrested her stupid ass*)、*Self Camouflage Construction* (Collins, Moody and Postal 2008) (例 *His stupid self in trouble now*)、さらには英語を含む広範な言語に観察される *Qualitative Binominal Noun Phrase* (Aarts 1998, Asaka 2002, Napoli 1989, den Dikken 2006) (例 *that fool of a husband*) などにも分析を広げる可能性を示唆した。これらの具体的分析についてはさらなる検討が必要であり、稿を改めたい¹⁶。

*本稿は2015年日本英文学会第87回大会における口頭発表「同格表現とタイプ制限」の内容を加筆、修正したものである。口頭発表においては立命館大学の蔵藤健雄氏、および東京理科大学の北田伸一氏から貴重なコメントをいただいた。また、昭和大学の須田拓基氏には本稿の原稿に細かく目を通していただき、数多くのミスの指摘や有益なコメントを頂戴した。これらの方にこの場を借りて心よりお礼申し上げる。言うまでもなく本稿に残った誤り、不備はすべて筆者の責任である。

注

1. 日本語にはその他の同格表現として以下のようなものがある。

- (i) a. その図書館では本を借りた経験がない。
- b. 故郷ではもう桜が咲いたという知らせを受け取った。
- c. 我々日本人にはその問題が理解できない。
- d. 首都東京でも今年は地価が下がっている。
- (ii) a. 弟の太郎が来月結婚する。
- b. 日本人の我々にはこの問題が理解できない。
- c. 首都の東京では相変わらず地価が上昇している。
- d. ビールの冷えたのを飲みたい。

(ii) は一見 AGNP と同じ形式を持つが、後述するように両者には統語的、意味的な違いがみられ、区別されるべきである。また、(iid) の形式をもつ表現を Hiraiwa (2012: 246) は ‘No-introduced Relative’ と呼ぶ。

なお、国語学における鈴木 (1978-1979) や中野 (2004) の研究では AGNP や (ii) を「ノ格の名詞連語」として扱うが、AGNP を独立した下位タイプとは捉えていない。例えば、中野 (2004) で挙げられている膨大な数の実例の中で AGNP に属するものは「皮のまがいもの」などきわめてまれで、それも「『関係基準になるひと・ものなど』と『関係性』とのむすびつき」として「夜の逆」や「たぬきの同類」などの表現とまとめられている。

2. AGNP の内部構造に関して本稿では具体的な提案は避けるが、おそらく以下のような構造を持つと考えられる。

(i) $[_{NP}[_{NP_1} \text{この} [_N \text{赤い} [_N [_N \text{Tシャツ}]]]]]- \text{の} [_{NP_2}[_{N'} \text{売れ残りの} [_N' [_N \text{Lサイズ}]]]]]$

これ以降の議論では AGNP の詳細な内部構造には立ち入らず、簡略化した $[_{NP}[_{NP_1} \text{no}[_{NP_2}]]]$ の構造に基づいて話を進める。

3. LINKER の実体について Hiraiwa (2012, 2013) は詳述を避けているが、汎言語的に語順倒置を媒介する機能範疇であると仮定されている。Linker を仮定した他言語の分析については Baker and Collins (2006)、den Dikken (2006) などを参照。

4. Hiraiwa (2012, 2013) は類似構文である *No-introduced Relative Clause* (i) についても、外的主要部関係節 (Head-External Relative Clauses) (ii) を基底とした語順倒置による派生を仮定するが、本稿では *No-introduced Relative* およびその具体的分析には立ち入らないことにする。

(i) [ネギの細かく刻んだの] を使った。

(ii) [細かく刻んだネギ] を使った。

5. Hiraiwa (2012:357, 373 fn. 14) を参照。鈴木 (1978-1979)、中野 (2004) ではノ格の名詞連語に観察される名詞間のさまざまな意味関係が詳細に記述されている。日本語以外の言語の所有構文 (Possessive Construction) 中に成立する意味関係については、Barker (1995)、Dixon (2010: Ch. 16)、Jackendoff (1977)、Langacker (1991: 166ff) などを参照されたい。

6. (16) は依然として容認度が低いと感じられるかもしれないが、 NP_1 を「勉強机」などに変わるとさらに容認度は高まる。これは後で論じる (7a',b') の対比と同じ要因が関わっていると思われる。なお、 NP_2 として「…製」の表現を取る AGNP として次のような実例が見つかる。

- (i) (40) a. Yシャツを買った時に付いてる [立て襟のナイロン製] を探しています。
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13129454548)
<accessed September 3, 2021>
- b. [ブリーフケースの革製] でおすすめは？
(<https://mens-modern.jp/7617>) <accessed September 3, 2021>
- c. いわゆる [物干し竿のアルミ製] のごついものでも耐荷重は20kg位ですし […]
(<https://realestate.yahoo.co.jp/knowledge/chiebukuro/detail/1466487689/>)
<accessed September 3, 2021>

7. ここでのタイプ (type) は論理学のタイプ理論におけるそれではなく、トークン (token) との対比で用いられる意味でのタイプである。Jackendoff の概念意味論では Entity も Thing も同じ概念構成素であるが、両者は上位タイプ、下位タイプの関係にある。(Jackendoff 1990: 22, 24)

- (i) [Entity] → [Event/Thing/Place/…]

以下で提案する「タイプ同定」はある環境下に生じた Thing の意味範疇をさらにその下位タイプによって特定する操作として捉えることができる。

8. 意味的主要部編入による NP₂ への THING(S) の編入は Jackendoff (1997) , Culicover and Jackendoff (2005) など提案されている強制転換 (coercion) の一種とみなせるかもしれない。

- (i) The ham sandwich over there in the corner wants some more coffee.

- (ii) [PERSON CONTEXTUALLY ASSOCIATED WITH NP]

例えば、Jackendoff (1997: 57, 58) は、(i) の the ham sandwich という NP はウエイトレス同士の会話という文脈の中で (ii) の下線部分の意味が付け加えられ、THING から PERSON の変換が起こると主張する。このような強制変換による PERSON の挿入の可能性は当該の NP 内部の意味計算からだけでは決まらないが、AGNP における THING(S) の編入は § 4.2 で論じる意味的・談話的条件に従うものの、基本的に AGNP 内部の意味だけから決まるという点で両者は異なる。意味的主要部編入をタイプ強勢変換に一般化できるのかどうかという理論的問題については今後の検討課題とする。なお、タイプ強制変換 (type coercion) については Pustejovsky (1995) も参照されたい。

9. Hiraiwa (2021, 2013) の分析でも本稿の分析でも (24) で削除されているのは NP であるが、以下の議論では当該現象に対する伝統的な名称である「N' 削除」を使うことにする。

10. (38) において編入されているのは THING ではなく明らかに PERSON である。

PERSON(S)の編入については後の議論でも触れる。

11. 興味深いことに、AGNPの「先生の女」が容認不可であるのと同様、後で言及する英語のQualitative Binominal Noun Phraseにおいてもそれに対応する表現は許されない。

- (i) a. *that professor of a man
- b. *that man of a professor
- c. *this doctor of a woman

(Taylor 2006: 245, Cover 2008: 49も参照)

Cf.

- (ii) a. that fool of a husband
- b. that idiot of a prime minister

(Arts 1998: 118)

この事実はこのような表現に人間言語に一般的な制約が働いている可能性を示唆するが、それがどのような制約であり、ここでの分析を敷衍してどのように説明するかについては今後の課題としたい。

12. (46)のようにEntityの読みを持たずPropertyのみを表すことは、あるNPがAGNPのNP₂として用いられるために満たさなければならない必要条件である。これは「メス」だけでなく、実際、(1)のすべてのNP₂に当てはまる。

- (i) a. ?? 彼から古いLサイズをもらった.
- b. ?? そのLサイズはとても安かった.
- (ii) a. ?? あの最新号を立ち読みした.
- b. ?? 分厚い最新号が発行された.

(i) (ii) は「Lサイズ」と「最新号」の意味的主要部のタイプを特定する手掛かりが文脈から与えられない限り、容認不可である。AGNPのNP₂はこの意味的条件に従うからこそ意味的主要部編入の適用を受けなければならないのである。

13. 「女のやつ」の先行詞が人間とも物ともいえないような場合、文脈を整えるとかなり容認度が上がる。

- (i) a. ? 映画『ブレードランナー』ではアンドロイドの女のやつが主人公の命を狙う.
- b. ? 幽霊の女のやつはだいたい怖くて恐ろしい顔をしている.

しかし、この場合でも「やつ」をProにするとかなり不自然に聞こえる。このことから(42)の容認度は(48)の意味表示には反映されていない微妙な意味的(あるいは談話的)要因が関わっていることがわかる。

14. 菊地 (2008) を参照。また、国語学における当構文の扱いについては中野 (2004: 212-213) を参照
15. (54)の意味表示は菊池 (2008: 287) が主張する評価的同格構文における「二重の指示関係」(double reference) と両立する。
16. 検討課題として特に重要なのは、高橋 (2015) で指摘したように、AGNP も含めたこれらの構文に見られる統語的主要部と意味的主要部のずれをいかに扱うかという問題である。AGNP に関しては § 3.3 の最後で述べたように、意味的主要部編入とタイプ同定によってこれを正しく捉えられるが、他の構文についてはこれらの意味的操作をどのように一般化、あるいは精密化するかが問題となる。この点に関しては注 8 も参照されたい。

参考文献

- Aarts, Bas. 1998. Binominal noun phrases in English. *Transactions of the Philological Society* 96.1: 117-58.
- Asaka, Toshihiko. 2002. A Lexical Licensing Analysis of the Adjectival Noun Construction. *English Linguistics* 19.2: 113-141.
- Baker, Chris. 1995. *Possessive Descriptions*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Collins, Chris, Simanique Moody, and Paul M. Postal. 2008. An AAE camouflage construction. *Language* 84.1: 29-68.
- Cover, Nobert. 2008. Uniformity and diversity in the syntax of evaluative vocatives. *J Comp German Linguistics* 11: 43-93. Springer.
- Culicover, Peter. W. and Ray Jackendoff. 2005. *Simpler Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- den Dikken, Marcel. 2006. *Relators and Linkers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dixon, R. M. W. 2010. *Basic Linguistic Theory. Volume 2: Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Hiraiwa, Ken. 2012. The mechanism of inverted relativization in Japanese: A silent linker and inversion. *Journal of Linguistics* 48.2: 348-388.
- Hiraiwa, Ken. 2013. Kuroda's Left-Headedness and Linkers. In Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.), *Japanese Korean Linguistics* 20. Stanford, CA: CLSI Publications: 329-345
- Jackendoff, Ray. 1977. *X-Bar Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1997. *The Architecture of the Language Faculty*. MA: MIT Press.
- 菊池朗. 2008. 「評価的同格構文について」『言語研究の現在—形式と意味のインターフェース』金子義明, 菊地朗, 高橋大厚, 小川芳樹, 島越郎編. 東京: 開拓社. 280-290.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. II: Descriptive Application*.

- Stanford, CA: Stanford University Press.
- Levine, Robert D. 2010. The Ass Camouflage Construction: Mask as Parasitic Heads. *Language* 86.2: 265-301.
- 中野はるみ. 2004. 『名詞連語「ノ格の名詞+名詞」の研究』. 東京: 海山文化研究所.
- Napoli, Donna Jo. 1989. *Predication Theory: A Case Study for Indexing Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. MA: MIT Press.
- 鈴木康之. 1978-1979. 「ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ (1)」教育国語55号12-24, 56号66-84, 58号87-97, 59号67-81.
- 高橋寛. 2015. 「同格表現とタイプ制限」日本英文学会第87回大会 (立正大学品川キャンパス) における口頭発表. *Proceedings*: 25-26.
- Taylor, R. John. 2003. *Linguistic Categorization* (3rd edition). Oxford: Oxford University Press.

Received : September, 21, 2021

Accepted : November, 2, 2021

